

観戦記者・倉島竹二郎

田代深子

序

倉島竹二郎（一九〇二〈明治三五〉年一月九日―一九八六〈昭和六一〉年九月二七日）は、『国民新聞』において一九三二（昭和七）年から将棋観戦記を書きはじめた（倉島一九七二）。その後、名人戦第一期（一九三五〈昭和一〇〉年）より『東京日日新聞』（現毎日新聞）の嘱託観戦記者となり、戦中戦後の一時期を除いて一九八一（昭和五六）年（継続的には一九七六〈昭和五一〉年）まで新聞紙上に書き続けた。囲碁観戦記も手がけ、また将棋雑誌や一般雑誌にも囲碁将棋にまつわる多くの随筆を寄せている。NHKの将棋トーナメントではラジオ放送時から棋士に対する「質問役」を務め（倉島一九五六）、テレビ放映になってからも一九八一年まで「さき手」として不定期に登場（『NHK

アーカイブス』<https://www.nhk.or.jp/archives/chronicle/search/?keyword>

=%E5%80%89%E5%B3%B6%E7%A%B%9%E4%BA%8C%E9%83%8E&op=0&rec_count=50&page=1 最終閲覧二〇二三年一月三日）、その大柄な姿を将棋ファンに記憶されている。

倉島は、観戦記者となる直前まで、『三田文学』などに短編小説を発表する駆け出しの作家であった。将棋はアマチュアとしては強かったが棋士を目指していたわけでもなく、また新聞社の人間でもない。将棋観戦記の仕事を依頼されたのは、倉島が将棋好きで、一応プロ作家でもあり、そして生活に困窮しているのを文学と将棋の仲間が慮ったところがある。倉島自身、当初は糊口を凌ぐためだけと考えていた。

スタートが小説家であり素人将棋指しであった倉島の観戦記は、棋譜自体を精密に解説・分析するよりも、対局情景の描写、棋士たちのふるまいや来歴を随筆風に書き込んだところに特徴がある。先行して著名だった観戦記者・菅谷北斗星が、観戦記に読物的要素を取り入れていたことを見習いつつ、倉島も独自性を出すことに努めた。いわゆる「将棋めし」を最初に書いたのも倉島であった（小笠原 二〇一九）。倉島の観戦記は、彼が書いてきた小説と同様に温かみがあり文体も読みやすく、愛棋家のみならず、新聞に何気なく目を通す一般読者層にも人気を博すこととなる。

文壇、将棋界、また軍属にあったときも、倉島はその大らか

さと愛嬌で、周囲の人々から愛されていた。飲食、金銭、仕事や勝負のコツなど、周囲から与えられるものは悪びれず受け入れ、あちこちで感謝を書き綴った。大山康晴十五世名人は、倉島の追悼インタビューで「人の悪口はいわない人」「誉めるのが得意」「人から何か貰うのが上手な人だった」(大山一九八六)としている。そのような人柄を愛した作家、菊池寛は亡くなる前日まで倉島と将棋を指すような親しい間柄で、戦中戦後に困窮していた倉島を経済的に支援していた(倉島一九七〇)。

本稿では、倉島竹二郎の主に関半生、変動に満ちた終戦直後までを、倉島自身や文学者の記述から辿っていききたい。

生い立ち

一九〇二(明治三五)年一月九日、京都市に生まれる。父、母、兄との四大家族で、家は祇園の女郎屋街「乙部」(現在の祇園東)にあった(倉島一九五三)。倉島の父は花街の中で郵便局を引き受け(水上一九三三「一九二九」)、「金を貸していたよう」(小島一九六七)だという、上流ではないが裕福な家庭だった。子どもの頃から大食漢で知られ、「すもとりぼん(相撲取坊)」と呼ばれるほど体格がよかった。勝負事が好きで力士と大食いを競い合ったり(倉島一九五三)、将棋については「小学生上

級生のころに教員との対局に勝っていた」と書いている(倉島一九八二)。

中学生時代にはテニスに夢中になった。テニスプレイヤー熊谷一弥選手らに憧れ、卒業後に「名古屋の東洋紡績にテニスで雇われていたことがあり」、「実業庭球大会に京都代表で出場し、決勝戦までいった」(倉島一九八二)という。たんなる趣味の範囲ではなかったようで、小学校の同級生であった三田文学同人、柳原利次も「今でも時折、彼のラケットを捨ててしまったのを惜しがっていう人に会う」(木村、柳原、今井、平松一九二八)と書いている。

しかし青春期をむかえた頃、倉島は文学に傾倒。「国木田独歩や有島武郎、それにトルストイやドストエフスキー、ツルゲネーフやチェホフなど、ロシア作家の翻訳を乱読して、いつかどの文学青年を気取るようになった」(倉島一九八二)。やがて小説家となることを志し、早稲田大学か慶応大学の文科に行きたいと言いはじめた。

慶応義塾大学と三田文学

東京へ行き小説家をめざすことに両親は反対する。ところが倉島を溺愛していた母親が、哀れに感じてか諦めさせるために

か、「建仁寺の境内に店を出している易者」のもとへ倉島を連れて行ったというエピソードが記されている(倉島一九八〇)。易者から「物書きには向いている」と占われると、転じて母も味方として父を説得するようになり、東京行きは許された。なお、この易者からは「一生勝負事と離れられない」とも言われたと倉島は付け足している(倉島一九八〇)。

慶応義塾大学への入学時期ははっきりしない。だが一九二三年(大正二二)年九月一日、高輪御所付近の下宿で関東大震災に罹災した際には予科生となっている(当時二〇歳)。もとより不真面目な学生であったが、罹災後は厭世観が高まり放蕩に拍車がかかって、年数は不明だが留年もしている(倉島一九八〇)。大学では国文学を専攻し小島政二郎(一八九四―一九九四)に師事。小島とは後にも家族ぐるみで往来する長い付き合いとなる。

出来ない生徒という一番最初に思い出すのは倉島竹二郎君である。

この人くらい出来ないことを苦にせず、ノビノビと学生生活を楽しんだ学生は外に一人もいない。(小島一九六七)

大食漢、遊び好き、陽気なのんき者、人の集まりで話せば場

がなごみ注目が集まる、といった人物像を小島は記している(小島一九六七)。もとより小島は菊池寛と親交があり、倉島が学生時代から菊池と知遇を得たのは小島の将棋を指せる教え子³だったからとも考えられる。

裕福で能天気な大学生活をすごしていた倉島であったが、二三歳のとき(一九二五(大正一四)年)に父が死去してから状況は一変する。父の遺産をすべて引き継いだ兄の「不始末」(倉島一九七二)により、実家が早々に破産したのである。兄は破産後、家族を捨てて四国遍路に向かい、そのまま消息を絶つこととなる。住まいも失った母と甥たちは東京の倉島のもとに身を寄せ、倉島は突然に貧窮した(倉島一九七二)。倉島はこのことを短編小説として文藝春秋に発表し(倉島一九三二)、また小島も驚きがあったのか実話として記載している(小島一九六七)。そうした頃、一九二五(大正一四)年に休刊していた『三田文学』が、水上瀧太郎(一八八七―一九四〇)らによって翌年一九二六(大正一五)年四月に復刊されることとなった。倉島は一念発起し、復刊報告会に参加、身長五尺六七寸、体重二十貫を超える体格と京都弁まじりの訥弁で身の上を話し、参加者たちに強い印象を残した(水上一九三三〔一九二九〕)。

以降、『三田文学』誌上でコンスタントに短編小説を執筆、自身の家族を書いた私小説、特に「久富」という甥が登場する

家庭ドラマ作品が「久富物」と呼ばれ人気を得るようになった（水上一九三三〔一九二九〕）。

倉島は水上の催す「水曜会」に参加するようになり、ここで多くの文壇関係者と知遇を得た。水上は将棋も愛好し、水曜会でもよく指されていた。文壇内では将棋の団体戦なども催されており、倉島は将棋の強さを買われて出場していた（倉島一九八二）。

小説家から新聞観戦記者へ

一九二九（昭和四）年、慶応義塾大学文学部国文科を二六歳で卒業（倉島一九七二）。新進小説家として『三田文学』のほか『文藝春秋』を含むいくつかの雑誌に短編小説などが掲載された。しかし原稿料だけで生活は成り立たず、母親とまだ幼い甥二人を抱えて貧窮していた。

倉島は困窮の様子も隠すところがなく、小説にも書き、さまざまな形で周囲の支援もあったようである。そうした状況の一九三二（昭和七）年、思わぬ仕事が無い込む。『国民新聞』の将棋観戦記執筆の依頼を受けたのである。

関東大震災被害から経営不振が続いていた『国民新聞』は、一九三二（昭和七）年五月、相場師で社会活動家の伊東ハンニ

（二八九八―一九六九）の買収により新展開を図る。『報知新聞』の敏腕記者だった御手洗辰雄（二八九五―一九七五）を編集局長として迎え紙面刷新、娯楽欄拡充が行われることとなった。将棋欄に菅谷北斗星（二八九五―一九六二）並の観戦記者を配りたいと考えた御手洗が、懇意の文藝春秋社幹部・佐佐木茂索（二八九四―一九六六）に相談すると、佐佐木は倉島に声をかけた。月収一〇〇円程度の定収入が見込めるという条件を、倉島は二つ返事で引き受けた（倉島一九七二、一九八二）。

倉島はその時期、予備役将校として軍役に就いていたが、非番の折を見て『国民新聞』将棋欄をとりしきっていたプロ棋士の大崎熊雄（二八八四―一九三九）宅へ挨拶へ赴いた。プロ将棋界に縁がなかった倉島は、初対面の大崎の豪放磊落ぶりに驚き、感銘を覚える。

当時の将棋界では、関根金次郎（二八六八―一九四六）、土居市太郎（二八八七―一九七三）、そして大崎ら一部の棋士が門弟や派閥を抱え、各地方新聞社から個別に将棋欄を請け負い運営することで利益を得ていた。大崎は『国民新聞』『時事新報』のほか、十何紙かの地方新聞の将棋欄を引き受け、将棋欄に載せる対局の企画、棋士の斡旋、観戦記執筆までを行っていた。観戦記は大崎が口述し、内弟子たちに筆記させるという形で多数をこなしていたと倉島は書いている（倉島一九七二）。

倉島は大崎傘下で観戦記を執筆する状況であるが、執筆自体は単独で行う。しかし大崎の「いっしょに仕事をするには近い方が都合がよい」という勧めに従い、大崎家付近の千葉県市川町、先に菅谷北斗星が住んでいた借家に家族で移り住むこととなった。また正確な時期は不明だが、この市川在住期（一九三二～一九三四）に、神田の料理屋の娘であった歌子と見合結婚をしている（倉島一九五四、小島一九六七）。

観戦記者「棋狂子」（大崎と御手洗が相談して決めた筆名）として執筆活動を始めるにあたり、倉島は「観戦記に新しい面をひらきたい」（倉島一九七二）と考えた。

当時の観戦記は碁も将棋もまだ解説あるいは講評の域を出ないものが多かった。そのことで最も光っていたのは、「読売新聞」の棋欄で、正力松太郎氏の卓見で観戦記を重視し、碁は初代覆面子、将棋は北斗星が麗筆を振るって、江湖の喝采を拍していた。

北斗星は早大出の文士で、文章も非常にすぐれていたが、北斗星は大崎八段といっしょに仕事をしている間に図書館通いをして勉強したらしく、将棋の歴史に精通し、またむかしの名匠や巨匠のことをよく調べ上げていた。そして、その蘊蓄を観戦記の中に取り入れて新機軸を打ち出し、よほどの好棋家以外に

は無味乾燥のきらいのあった解説的、講評的な観戦記を読み物として十分楽しめるものにした。これがどんなに一般大衆と将棋の繋がりを深め、将棋の普及発展に役立ったかもしれない。いわば、北斗星こと菅谷要氏は、近代的な観戦記の始祖ともいべき功労者だった（倉島一九七二）。

「張り合うという気持ちではないにしても、北斗星の亜流とは思われなくなかった」（倉島一九七二）倉島は試行錯誤し、付け焼き刃の知識で書くのではない方向性を見つけた。

それは、対局風景の描写であった。その日の天候や対局場の紹介（中略）また対局者の服装や対局中の顔色動作などをできるだけリアルにくわしく書くことである。私のねらいは、読者をして勝負の場の空気を実際に観戦しているように感じさせることであった。（中略）時には編集部の方から「将棋指しが昼飯になにを食ったか、そんなことまで書く必要ないじゃないか」と横槍の出たこともあったが、私は「そんなばかな話はない。鰻井を平らげると、筑蕎麦ですませるのでは違う。それでその棋士の嗜好もわかれば風貌もおのずと感じられ、読者は親しみをますじゃないか」と反駁して改めようとしなかった。（倉島一九七二）

対局場の情景や雰囲気、棋士の間味を感じさせる読み物としての観戦記は好評を博した。同時に、対局取材と執筆に追われる倉島は小説を書かなくなっていく（倉島一九八、小島一九六七）。将棋界は激動期であり、また個性的な棋士たちとの交流や、目前でくりひろげられる真剣勝負は倉島の好むところであった。

しかし『国民新聞』は、社内の軋轢で御手洗一派が退社（倉島一九七二）、伊東ハンニが翌一九三三（昭和八）年一月には経営不振のため社長退任（永松一九三四）。将棋観戦記を含む娯楽面はあつという間に縮小された。観戦記欄の縮小には不満が残ったものの、倉島の稿料は大崎の口添えで減額されることなく、その後も観戦記を三年間担当する（倉島一九七二）。

日本将棋連盟の運営においても変化が起きていた。「実力名人戦」開始の一〜二年前から、一部棋士の寡占状態だった地方新聞観戦記の運営権を、連盟で一括管理するという方針が示されていた。動きの中心だったのは若き連盟幹事長・木村義雄（一九〇五―一九八六、第二期実力制名人、十四世名人）で、大崎は倉島を伴い、『報知新聞』に囑託として詰めていた木村を訪ね、激しい抗議を行っている。木村は抗議を受け流し、結局、大崎は観戦記の権利を連盟に率先して渡している（倉島

一九七二）。

そして、中島富治（二八八六―一九五六）の立案と推進によっていに現実のものとなった実力制の「名人戦」第一期が、一九三五（昭和一〇）年六月一六日から二年にわたって行われることとなった。倉島は、名人戦棋譜独占権を得た『東京日日新聞』（以下『東日』、一九四三（昭和一八）年より『毎日新聞』）の学芸部員・黒崎貞治郎（一九〇三―一九七五）に抜擢され、名人戦開始と同時に『国民新聞』から移籍する。『国民新聞』に対して不満を抱えていたところ、大崎からも激励を受けての決心だった（倉島一九七二）。

これより倉島は、戦時中に同社を退職した後にも、長年にわたり『毎日新聞』で観戦記を書き続けることになる。

出征——南方徴用作家

『東日』に移籍して三年、名人戦の観戦記者として筆を振るいながら、「神田事件」から日本将棋連盟分裂（一九三五（昭和一〇）年一月）、将棋大成会への再統合（一九三六（昭和一一）年六月）、そして木村義雄第一期実力制名人襲位（一九三八（昭和一三）年二月）と、倉島は将棋界の激変を目の当たりにした。そして社会状況もまた大きく変動していた。

一九三七（昭和一二）年七月七日の盧溝橋事件で日中の戦況が激化。倉島も、一九三八（昭和二三）年五月、召集令状により京都・歩兵第九連隊第三大隊第四中隊第二小隊の小隊長として出征することとなる（倉島一九七九）。

菊池寛、木村名人ら大勢に見送られて東京駅を出発。観音信仰篤い母からはできるだけ殺生しないよう告げられた。菊池とは将棋を通じた交友が続いており、このときも過分なほどの饒別を渡されている。

軍服のポケットは皆が押し込んでくれた饒別ではち切れそうになったが、途中で見るのも変なので京都の親族の家に着いてから調べると、それが一年分のサラリーほどあったのには驚いたし、こんなことが度々あれば蔵がたつなァと、欲の深いことを考えたのを覚えている。中に一つの原稿紙にくるんだのがあったが、開いて見るとそれは菊池寛先生からのもので、数枚の十円札が無造作に入れてあり、原稿には「木村のごとくよく守り、花田のごとくよく攻め、命恙なく勝ち来たらんことを祈る。菊池寛」とペン書きの大きな字でしたためてあった。私の脳裡には顔をクシヤクシヤにしながら小旗を振り振り何か叫んでいられたプラットホームの菊池先生の姿がよみがえると、思わず泣いた。（倉島一九七二）

京都から、中国・杭州へ移動。小隊長として隊に馴染んできたところ、軍報道部の杭州所長に任命され、従軍記者の補助、前線新聞発刊等にあたることとなった。報道部への異動について倉島本人は「命令なれば是非がなかった」（倉島一九七九）としているが、菊池寛が内閣情報部の命を受け編成した「ペン部隊」が関係している可能性はある。一九三八（昭和二三）年八月にペン部隊発足。最初に視察に加わった小島政二郎は次のように書いている。

運がよければ、上海か、彼の駐屯先で倉島君に会えるかも知れないと思つて楽しみにしていた。

ところが、着いて早速聞いて見ると、倉島君は重営倉に入れているとのこと、菊池さんも私もビックリした。いろいろ聞き質して見たが、どうもハッキリしたことが分からないままに、私達は前線へ出て行つてしまった。

あとで倉島君に聞くところによると、重営倉の話は真赤な嘘で、第一、将校には重営倉なんてものはないというのだ。（小島一九六七）

小島や菊池との邂逅は叶わないまま、おそらくペン部隊帰還後に、倉島は揚子江安慶地区へ移動、揚子江湖畔にある部

落の独立警備隊長となった。この任地は比較的平穏だった
 ようで、倉島は警備隊の部下たちとのエピソードや、現地
 住民と交流があったことなどを戦中戦後に書いている（倉島
 一九四二、一九六二、一九七九）。

しかしやがて「マラリヤとアミーバー赤痢」に罹患、「酸鼻
 を極めていた」野戦病院で苦しんでいるときに、日本では大崎
 が他界（享年五六歳）したことを知る（倉島一九七〇）。多くの
 負傷者やマラリア患者、病院隣りの遺体焼き場を見ながら療養
 していた倉島は、書簡に句を添えて『三田文学』編集長和木清
 三郎へ宛て書き送っている。

（病を得て前線をさがる）

芋畑下痢にさす月の寒さ哉

（野戦病院にて）

さ庭辺は霜真白なり今朝もまた

屍焼く火の赤々と燃ゆ

（倉島一九三九）

一九三九（昭和一四）年八月末、招集解除され内地へ帰還、
 東京・駒込の自宅に戻った（この時期は、倉島が東京に戻って
 間もない九月に泉鏡花も他界し弔問に訪れたことから思い出し

ている）（倉島一九七〇）。

一九四一（昭和一六）年「太平洋戦争が始まる少し前」に、
 さらに招集があり大阪へ、そこから陸軍最初の報道班員として
 ビルマ（現ミャンマー）に派遣され、一九四三（昭和一八）年
 八月、バー・モウ政権発足後に帰還する（倉島一九七九）。ビル
 マでの長編手記『明けゆくビルマ』は、戦記であるが紀行文の
 要素も豊富である（竹松二〇一九）。現地の自然、人々、風習も
 物珍しげに生き生きと書かれており、倉島観戦記の手法がここ
 にも表われている。

闘病闘貧

一九四三（昭和一八）年、ビルマから帰国すると、毎日新聞
 社を依願退職する。周囲には強くひき止められたが、倉島は焦
 燥に駆られていた。

別段観戦記者がいやになっただけではないが、もはやのんきに
 将棋を観戦していられる時代ではなかった。（中略）

「国民の熱意がこんなに低調では、戦争は必ず負ける。この際
 なんとかして士気を鼓舞させねばならない」という、柄にない
 願いを起こしたからである。いまから振り返れば、ドンキホー

テ以外のなに者でもなかったが、当時の私の気持ちはまったく真剣で、祖国の急に殉じたい一心であった。(倉島一九七二)

戦争が終わったら社に戻って観戦記を書くようにと言い含められて退職した後、戦地から帰還した文化人組織「文化奉公会」会員として戦意高揚のための講演や文筆活動を行う(倉島一九七九)。すでに発熱など結核の徴候があったにもかかわらず、精神的な高揚にまかせて各地を回った。巨漢だった倉島がやせていく様子に気づいた菊池寛や、親しい棋士の花田長太郎(二八九七―一九四八)らは心配し、忠告や支援を与えている。特に菊池は、定収入がなくなったこの頃から戦後に至るまで、断続的に倉島に送金を続けた(倉島一九七二)。

一九四四(昭和一九)年の夏、招集により陸軍中尉として京都の連隊で補充兵教官となる。しかし繰り返す発熱や重度の腰痛など体調不良が続く。

腰痛のために京都で通院をしていたその年の晩秋、市内電車では倉島は偶然に坂田三吉(坂田三吉、一八七〇―一九四六)を見かける。国民服姿の人々の中で「黒紋付に仙台平の袴」「中折帽をアマダに被り」「好奇と非難の目を向け」られながら平然と立つ印象的な様子を、作品としても書き残している。

坂田翁は秋風に送られながら、信玄袋をブラブラさせ、白扇で拍子を取るようにして、ユックリ、ユックリと岡崎の方に歩いていった。斜陽がその黒紋付の後姿を赤々と染めていたが、その目には広い街中に坂田翁だけしかいないように見えた。それほど大きく堂々と見えた。

(中略)

私はサーベルの柄を握りしめながら、

「将棋の王様が行く、将棋の王様が行く」と、無意識につぶやいていた。(倉島一九七三)

坂田翁を見かけた数日後、肺のレントゲン検査結果により、初期の結核が発見され、軍医のはからいで同年末には除隊となった(倉島一九七二、一九七九)。

しかし駒込の自宅に帰ってから、栄養不足のせいもあり倉島の体調は回復せず、母、妻、そして乳幼児だった長女とともに、窮乏の療養生活が続いた(長男は長野県に集団疎開していた)。このころには、花田長太郎をはじめとする棋士らから食事を振る舞われたり、米を分けてもらうなどの援助があった。当時、周囲から受けた厚情について、倉島は後に感謝と共に記している(倉島一九七二、一九八二)。

一九四五(昭和二〇)年三月九日、東京大空襲の前日午前中、

倉島家付近に爆弾が投下された。家族は全員無事であったものの、爆風で家屋が半壊する。近隣の救助活動に無理をして参加した倉島は、その後しばらく高熱で寝込むことになった。そして六月、鎌倉腰越の漁村にあった妻の実家の別荘に転居。病身のうちに終戦を迎えた(倉島一九七二、一九七九)。時に倉島四二歳。

倉島はなかなか回復できず窮乏は続くが、戦時中から続く菊池の送金や、小島政二郎の物心両面にわたる支援、また『毎日新聞』の黒崎には会社から借り出したらしい一、〇〇〇円と木村義雄名人からの五〇〇〇円の見舞金を渡され、助けられている。妻が慣れない行商なども行つてしのぐうち、やがて「久富」のモデルであった甥たちも戦地から帰還して家計を助け、生活と健康は改善していく(倉島一九七二、一九七九)。

再び観戦記者として

一九四六(昭和二二)年五月からの「順位戦」開始決定に伴い、倉島は将棋大成会より観戦記の依頼を受けたが、健康状態が戻っておらず一度は辞退している。しかし第一期順位戦A級で塚田正夫が優勝、木村義雄名人への挑戦が決定すると、倉島宅に土居市太郎が訪れ、観戦記を直接依頼した。回復しつづつあつた倉島は、名人戦での観戦記復帰を決める(倉島一九七二)。

一九四七(昭和二二)年三月、第六期名人位決定戦第一局、木村義雄名人対塚田正夫八段(東京都牛込河田町・河田町会館)観戦記を『毎日新聞』に執筆。以後、二、五、六、七局の観戦記を担当した(『将棋棋士成績DB』<http://kenyu1234.php.xdomain.jp/menu.php> 最終閲覧二〇一三年一月二日)。

名人戦後、再び体調を崩し取材活動を休止するが、第二期順位戦が終了し、A級B級上位者による名人挑戦者決定戦が始まると、再び『毎日新聞』観戦記者としての活動に戻っていく(倉島一九七二)。

倉島は戦後、新聞社に籍は戻さなかった。そして多くの将棋雑誌・一般誌で囲碁将棋に関わる記事を書いたが、新聞観戦記については『毎日新聞』を主軸として執筆し続けた。一九四九(昭和二四)年、名人戦・順位戦主催が『朝日新聞』に移行すると、『毎日新聞』は一九五〇(昭和二五)年に王将戦を創設。その後一九七七(昭和五二)年まで、倉島の観戦記のほとんどが、王将戦(予選→タイトル戦)となる(前掲『将棋棋士成績DB』)。そして一九七七年に名人戦が再び『毎日新聞』主催となるのを機に、倉島は観戦記者引退を毎日新聞社より請願され、それを受け入れた(井口一九八六)。引退後は、名人戦の観戦記を何度か執筆するにとどまっている。

一九八六（昭和五七）年九月二七日、急性心不全のため八三歳で他界（写真で振り返る将棋史 思い出のアルバム「追悼・倉島竹二郎氏」『将棋マガジン』一九八六年二月）。倉島竹二郎は「観戦記者」と記される文筆家として、生涯を終えた。

倉島竹二郎と菊池寛

さかのぼって、一九四七（昭和二二）年の名人戦取材後、再び体調を崩し取材活動を休止していた倉島は、その間に『夕刊みやこ』において小説「将棋太平記」を連載していた（小島一九四九）。この作品は江戸時代の将棋界を題材とした歴史大衆小説で、一九四九（昭和二四）年五月に日東出版社より単行本として刊行される。

倉島初の小説単行本上梓ということで、菊池寛、小島政二郎、木村義雄ら縁の深い三名が序文を寄せている。しかし同書のあとがきで倉島は、刊行を待たずに他界した菊池への追悼を述べることとなった。

終戦後、公職追放されていた菊池寛ではあったが、倉島は旧と変わらず親しい間柄で、菊池が急逝する一九四八（昭和二三）年三月六日の前日にも、雑司ヶ谷の菊池邸を訪れている。菊池は病み上がりの様子だったが、倉島に『将棋太平記』序文を

頼まれると、「その場にあった便箋に鉛筆でサラサラと」（倉島一九七二）書きあげた。そして菊池の誘いで飛車落ち将棋を一局指し、下手の倉島が逆転勝ちする。

一番指して私は辞去することにしたが玄関先まで見送りにこられた先生が、ふと「倉島君」と呼び止められ

「君の将棋は筋は悪くないがガムシヤラすぎる。観戦記を書きつづけてゆく気なら、もう少し勉強するんだね」と、微笑しながらいわれた。こういった忠告は今まで一度も口に出されたことのない先生だけに、私は強く胸にこたえたが、思えば、それが先生の私への遺言であつたわけだ。（倉島一九七二）

倉島は後に、自身の観戦記執筆について「人の禪で相撲を取つてゐるような感じ」（倉島・加藤・東一九七八）がすると発言している。小説のように「自分の作品」ではないという意味もあるが、棋士や将棋そのものに対してへりくだり、戒める意味は、菊池からの言葉が影響しているとも考えられる。

さて、倉島は自他共に認める大食漢であり（食通ではない）、「将棋めし」も含め食の話題は事欠かない。戦後にはグルメ雑誌『あまカラ』にも何度か短文を載せていた。その中に「菊池

先生とお菓子の思ひ出」という一文がある（倉島一九五二）。戦時中に倉島が文藝春秋社を訪ねたときのエピソードである。

所謂「通」といふではなかつたが、菊池寛先生ほどお菓子の好きだつた人を私は知らない。（中略）

これも戦時中のことだが、或日私が文芸春秋に先生を訪ねると、先生はテーブルの引出しから茶袋のやうな円筒形の紙袋を取り出し

「倉島君、よいものをやらう。手を出し給へ」と、云はれた。

私が両の掌を開いて差出すと、その上にサラ／＼とあけて下さつたのは、其頃既に姿を消して久しかつた小豆の甘納豆であつた。私は舌鼓を打ちながら早速その場で平げ、掌についた甘い粉を勿体ないとペロ／＼と舐めたが、先生はそれを満足さうに見遣りながら「ね、君、旨いだろ」と、自分も納豆をつまんで幾度も口にほり込み、後は大切さうに引出しにしまはれた。

（倉島一九五二）

こうした児童を共有できる精神性、「通」であることを求めず「甘さ」を包括する大衆性が、倉島が菊池を慕つた理由でもあるだろう。そしてそうでありながら、将棋という苛烈な競技

を尊ぶ「一ファン」として大衆に伝えるという態度もまた、菊池から影響を受けたものかもしれない。

参考文献

井口昭夫、一九八六、「倉島竹二郎さんを偲ぶ 観戦記でつらぬいた生涯」、『将棋世界』二月

涯、「将棋世界」二月

大山康晴、一九八六、「倉島さんの思ひ出」、『将棋世界』二月

小笠原輝、二〇一九、「メディアが発信してきた「将棋めし」と「観る将棋ファン」」、『将棋と文学スタディーズ』、将棋と文学研究会

菊池寛、一九四九、「序」、『将棋大平記』（倉島竹二郎著、日東出版社）

木村庄三郎・柳原利次・今井正剛・平松幹夫（掲載順）、一九二八、「プロファイル（一）倉島竹二郎の素顔」、『三田文学』二月

倉島竹二郎、一九三三、「ひつくりかへつてゐる兄」、『文藝春秋』二月

——、一九三九、「再び戦線へ」、『三田文学』二月

——、一九四一、「警備隊」、『我らは如何に斗つたか』（三省堂出版部編）、三省堂・三省堂大阪支店

——、一九五〇、「私の闘病闘貧の記」、『眠られぬ夜のために…療友に贈る書』（高見順編、四季社）

——、一九五二、「菊池先生とお菓子の思ひ出」、『あまカラ』六月

——、一九五三、「大食ひの記」、『あまカラ』一〜六月

——、一九五四、「母と家と妻と」、『新文明』二〇月

——、一九五六、「放送しくじりばなし」、「放送文化」一〇月

——、一九六二、「隊長豚の話」、「あまカラ」二月

——、一九七一、「角川選書四九 近代将棋の名匠たち」、角川書店

——、一九七三、「将棋の王さま」、「勝負師群像」、光風社書店

——、一九七九、『観音妙智力』、大法輪閣

——、一九八一、「勝負を見つめて五十年—将棋とわたし」、将

棋世界 一月

倉島竹二郎・加藤治郎・東公平、一九七八、「観戦記あまから談義」、『榎

(えい)人間讃歌』五月

小島政二郎、一九四九、「序」、『将棋太平記』(倉島竹二郎著、日東出版社

——、一九六七、「倉島竹二郎」、「なつかしい顔」、鶴書房

竹松良明、二〇一九、「倉島竹二郎—南方徴用作家研究・ビルマ編⑥」、「大

阪学院大学通信』五〇(六)〜(八)

永松浅造、一九三四、「東洋の花伊東ハンニ」、学芸社

水上瀧太郎、一九三三、「一九二九」、「倉島竹二郎氏の人と作品」、『貝殻

追放』、日本評論社「初出『三田文学』一九二九年九月」